

for five years
星野陽子の5年間



for five years

ファンシーなホログラムシートやアクリル板を大胆に配しインスタレーションを創る星野陽子(1991-)。作品は石油製品のチープな素材を使う一方、スケルトンのプラスチックからホワイトキューブへ落ちる色とりどりの色彩が大量消費時代のはかなさや独特な美学を感じさせる。着実に活動の幅を広げ、2016年には石橋財団国際交流油画奨学生となりアメリカ横断をするなどした。年が明けて今年1月、東京・銀座の個展会場で3フロアを使って新作を創るにあたり最近関心を持ち始めた「場所性」へと意識をむける。5年前からその軌跡を辿ることで、進取の気性に富む作家の核心部が見えてきた。



(Thing/Thing) 2014

川崎ブランドデザイナー代表でコレクターの川崎力宏がオーナーを務める銀座レトロギャラリーMUSEは築85年になる一棟のビル。ここが1月に行われる個展の会場だ。東京・銀座4丁目の昭和通りに面した一等地のビル群だが、川崎の尽力で当時の建築基準がそのまま認められる「既存不適格」建築として唯一、戦前に建造された趣きを現代まで残している。その雰囲気と真逆の印象の作品を創る東京藝術大学修士課程1年生の星野陽子が展示すること

モノがモノでなくなる瞬間をつかむ

になるきっかけは2年前。東京藝大絵画科油画コースの恒例である3年次進級学外展示を東京・千代田区のアートセンター13331で行う際、会場費を協賛してもらったため川崎の元を訪れたことにあった。

その後、星野のインスタレーションを見た川崎から古い建築へ異色のエッセンスを取り入れたいと熱烈なオファーがあり今回の展示に繋がっていく。現在より5年前の星野だが、多摩美術大学で飯面浪人し、東京藝大油画コースへの転学を留意していた。当時は抽象画を描く学生であったというが、藝大1年次のカリキュラムに東京を歩き回りその印象を立体にする課題があり、そこでインスタレーションの面白さに初めて気がついた。

「絵画を描く際、元々そこで平面に潰している空間が何なのかと気になっていました。それを3次元におきかえたいと思ったのがきっかけです。新宿の高いビル群を見上げて行くと感覚があつて。そのときの空気感と物と物の関係性を考えていた。普段私が絵の中に閉じ込めている眼に見えない空間を可視化してみようと実際に3次元で表現した作品が『Thing/Thing』。それをしたら、空間に自分が包まれる感覚やその空間でダイレクトに鑑賞者と「コミュニケーション」が生まれてきて、これは最高だなくって感じました(笑)」

『Thing/Thing』を皮切りに次々とインスタレーションを発表していく星野だが、そこには様々な障壁も待ち受けて



(America) 2016

星野陽子

1991年、横浜市生まれ。2017年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。同大学大学院美術研究科絵画専攻在籍中。カラフルなアクリルやプラスチックなど現代的な素材と、現象物や光を用いた色彩やかな彩で、様々なインスタレーション作品制作を行う。

るなど、商業での活躍の場もあった。だが、星野はあくまで現代美術の作品を通し自身の活動を続けたいとする。「ディスプレイのデザインなどは作家性を出す隙がなく、機材さえ揃えば誰がやっても同じとなりかねない。今回の展示でも、イベント的になってしまふのは危惧していたからトランスミグレーション

ション(転生)というテーマを強く打ち出しています。むしろと付むこのビルを視覚的に異物化させるを試みます」芸術祭への参加経験から、そこできかねない作品制作への意識も芽生えた。様々な展示場所というお題を与えられることで表現の幅も広がる



(Intersection) 2015 3331での展示風景

展覧会
星野陽子「TRANSMIGRATION」
1月10日→1月28日
銀座レトロギャラリー MUSEE (ミュゼ) 銀座

「絵画では光の当たり方や物の重なりを描くことで、2次元の平面が3次元に見えるというイリュージョンが発生します。でもディスプレイに理由が必要ない。ですが、3次元はそももいかない。インスタレーションの空間構成に選ぶ物も抽象画と同様、自分の感覚でやっていきますが、例えばプラスチック製品など選んだ際、大量消費社会を批判したい文脈なのかと問われる場面もあったんです」

2次元と3次元のギャップをどう解消していくか、3年次まで星野は悩み続けるがその翌年に出会った現代美術コースの講師、美術家・毛利悠子の直感的な「動物になれ」というアドバイスや、新しく与えられた課題をこなすなか打開策をみつけていく。「ペインターの小林正人先生に出された課題に、私の2万円が友達が用意した素材からインスタレーションを4時間で作るライブパフォーマンスがありました(『Drawing Performance』)。素材は100円ショップで買われた200点の小物で、普段の私とは大きく制作環境が異なりました。ですが、その時に物と物の奇跡的な出会いというイリュージョンを発見したんです。例えばカプセルゼリーと洗濯バサミだけども、合わさったら全然違うものに見えてきます。この組み合わせはなかなかないという一瞬一瞬への感



(Drawing Performance) 2016

動が湧き、私の見方で物を本来の機能から解放して鑑賞者に提示できることへ面白さを感じ取ったんです。そこから、もう少し自由に考えていいんだと思えるようになりまし

た」その後、石橋財団の助成金を得、夏期休暇の2ヶ月間でアメリカ滞在を経験した。「大きいスケール感としての嘘という感じが面白くて。ラスベガスから特に強烈な印象を受けました。その後制作した『America』という作品では、現地の素材をたくさん使うので友達にはスーベニアートと呼ばれましたが(笑)」

空間演出にはいきたくない

90年代以降の日本は100円均一商品の拡大で、プラスチック製品を日常の中で手にする機会が増えた。星野は自作で使う蛍光色のルーツを自身の原体験と結びつける。幼少期を過ごした90年代はスケルトン製品のブームもあり、ゲーム機器、ZAP、自転車までもが半透明ということで人氣を集めた。「小学校ではラメペンが流

行し、中学校ではプリクラ手帳をいかにデコレーションできるか、おそらく色彩感覚としてはそういう色を勝手に自分で選択するということが刷り込まれてきている。色がどうというよりは、かわいいから選ぶところがあるでしょう。最終的に頼れるのは自分の感覚です」昨年4月にはラフォーレ原宿の店舗デザインを担当す

「銀座には夜のイメージがあり、私の中でベルリンのベルクハインという廃墟をクラブハウスにしたスペースが重なってきます。銀座MUSEEの特殊な屋上で見上げたむき出しの空間も印象に残っている。自分がコミットしたいと思う若い層に見てもらえるように、今回は20時まで開廊してもらっています。この独特な会場で、作品や作家と行われるコミュニケーションから、鑑賞者が何かを持ち帰ってほしいと思います」

空間構成の物を選ぶセンスは女子高生と楽しそうに語るその実、狙いは鑑賞者の受け取るイリュージョンの効果というこの落差も面白みの一つだ。様々な批評もテコにながら、シリアスなことも笑みに換えられるのが人間の強みだとポジティブに話す作家からは、骨太の創作意欲が伝わってきた。昨年、東京都美術館で行われた卒業展示では特に異彩を放っていたが、星野により転生された銀座MUSEEでも、その巨大なエネルギーを体感してみたい。